３　次の文章は『十六夜日記』の一節である。筆者の阿仏尼は、夫である当代の和歌の大家藤原為家の死後、息子の遺産相続をめぐる訴訟のために単身鎌倉に下り、既に半年以上にわたって鎌倉に滞在している。これを読んで、後の問に答えよ。　　　　　　　　　　　　　〈岡山大〉二〇二一年度出題

　夏のほどは、あやしきまでおとづれ絶えて、①おぼつかなきも一方ならず。都の方は、志賀の浦波立ち越えて、山、三井寺の騒ぎなど聞こゆるにも、いとどおぼつかなし。からうじて、八月二日ぞ、たしかなる使ひ待ち得て、日ごろ取りおきける人々の御文ども、取り集めて見つる。

　侍従為相の君のもとより、五十首の歌、当座に詠みたりけるとて、もしあへず、過ごさじとて下されたり。②歌もいとどおとなしくなりにけり。五十首に二十八首、合ひつるもあやしく、③の闇のひが目にこそはあらめ。その中に、

　　心のみ隔てずとても旅衣山路重なるの白雲

とある歌を見るに、この旅の空を思ひおこせて詠まれたるにこそはと、心をやりてあはれなれば、その歌のかたはらに、文字小さくて、返しをぞ書きそへてやる。

　　恋ひしのぶ心やたぐふ朝夕に行きては帰る遠の白雲

　また、同じ旅の題にて、侍従の歌に、

　　Ｉ　かりそめの草の枕の夜な夜なを思ひやるにぞ袖も露けき

とあるところにも、また、返事を書きそへたり。

　　Ⅱ　秋深き草の枕に我ぞなくふり捨てて来し鈴虫の音を

　また、の五十首の奥に、言葉を書きそふ。大方の歌ざまなどをほめも、また詠むべきやうなど記しつけて、奥に、人の事を、

　　Ⅲ　これを見ばいかばかりとか思ひ出づる人にかはりて音こそ泣かるれ

と書きつく。

注一　点＝出来のよい歌につける印のこと。

注二　心の闇＝「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」の古歌を踏まえた語句。

注三　この五十首の奥に、言葉を書きそふ＝この五十首の巻末の余白に評語を書き加えて、為相のもとに送り返すのである。

注四　昔人＝亡くなった夫為家を指す。

問１　傍線部①②③を現代語訳せよ。

問２　二重傍線部の「山」は、ある寺のことを意味している。その寺の名前を答えよ。

問３　Ⅰの和歌を、「草の枕」や「袖も露けき」がどのようなことを意味しているのかわかるように、現代語訳せよ。

問４　Ⅱの和歌には縁語の技法が用いられている。どの言葉とどの言葉が縁語の関係にあるのか、答えよ。

◎問５　Ⅲの和歌にこめられている詠み手の心情について、和歌の中に用いられている「これ」や「思ひ出づる人」が意味するものを具体的に示しながら、わかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝Ａ心配もＢ一通りでない

Ａ＝５〔「不安・気がかり」も可。〕

Ｂ＝５〔「並一通りでない・並々でない」も可。〕

　　　②＝和歌もＡますます Ｂ大人びた（ことよ）

Ａ＝３〔「いっそう」も可。〕

Ｂ＝７〔「大人びる」の意がなければ減点４。〕

　　　③＝Ａ子を思う親のひいき目によるＢ見間違いではあるだろう

Ａ＝３〔「ひいき目」は「心の迷い」も可。〕

Ｂ＝７〔「見間違い」の意がなければ減点４。推量「だろう」の訳ができていなければ減点３。〕

問２　比叡山延暦寺

「延暦寺」が答えられていればよい。

問３　Ａ母の旅の仮寝のＢ毎夜毎夜のつらさを思いやると、Ｃ都にいる私の袖も心配の涙で濡れることよ。

Ａ・Ｃがなければ全体０。「母」「私」の補いがないものは各減点

２。

Ａ＝４〔「草の枕」の訳「旅の仮寝」の意がなければ０。〕

Ｂ＝２〔同意表現可。〕

Ｃ＝４〔「袖も露けき」の訳「袖も涙で濡れることよ」の意がなければ０。〕

問４　「ふり」と「鈴」

問５　Ａ為相の五十首を見たならば、Ｂ亡くなった夫為家はどれほど感動するだろうかと思うと、Ｃ夫に代わって息子の成長を喜ぶ心情。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「これ」が意味するものとして「為相の五十首」がなければ０。〕

Ｂ＝３〔「思ひ出づる人」が意味するものとして「亡くなった為家」がなければ０。〕

Ｃ＝４〔詠み手の心情として「息子の成長を喜ぶ」の意がなければ０。〕

【現代語訳】

　夏の時分は、不思議なまでに便りがとだえて、問１①心配も一通りでない。都の方は、琵琶湖の波が荒く立って（＝志賀辺りで事件が起こって）、比叡山（＝延暦寺）と、三井寺（＝園城寺）との騒動などが耳に入るにつけても、一層心配である。やっとのことで、八月二日に、しっかりしている使者を待ち迎えて、ここ数日（都に）とどまっていた（都の）人たちの数々のお手紙を、まとめて見た。

　侍従為相の君の所から、五十首の歌を、即席で詠んだといって、清書も最後まですることなく、好機を逃がすまいと（都から）遣わした。問１②和歌もますます大人びた（ことよ）。五十首中に二十八首も、出来のよい歌の印を付けてしまったのも不思議で、問１③子を思う親のひいき目による見間違いではあるだろう。その中に、

　心だけは隔てないというものの（母の）旅装束と、（母と私を隔てる）山道に重なってかかる遠くの白雲（を都から眺めていることよ）。

とある歌を見ると、この（私の）旅の空を思いやって詠まれたのであろうと、（都の為相に）思いを馳せていじらしいと思うので、その歌の脇に、文字を小さくして、返歌を書き添えてやる。

　（遠くから）恋い慕う心が一緒に行くのか。朝に夕に（都との間を）行っては帰る遠くの白雲よ。

　また、同じ「旅」の題で、侍従の歌に、

　問３（母の）旅の仮寝の毎夜毎夜（のつらさ）を思いやると、（都にいる私の）袖も心配の涙で濡れることよ。

とあるところにも、また、返事を書き添えた。

　秋が深まった旅の仮寝に（虫ではないが）私が声をあげて泣く。（故郷に）ふり捨てて来た鈴虫（にも似たあなたたち）の鳴き（泣き）声を思って。

　また、この五十首の巻末の余白に、評語を書き加える。大部分の歌の姿などをほめもし、また詠むのにふさわしい手法なども書きつけて、終わりに、亡くなった夫為家のことを、

　この五十首を見たならばどれほど（涙を流して感動するだろう）かと思い出す人（＝亡くなった夫）に代わって（私が）声を出して自然と泣かれることよ。

と書きつける。